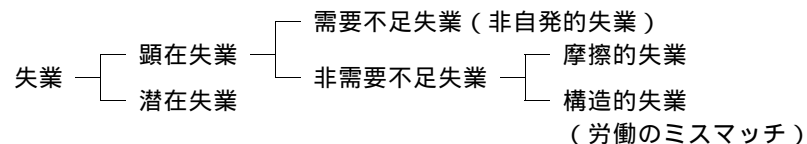


## 6 失業と物価

### 1. 失業の種類

失業は顕在失業と潜在失業とに大きく分類される。



#### 自発的失業

現行の賃金で労働供給を欲しないで、失業している状態をいう。

#### 非自発的失業

現行の賃金で労働供給を欲しているが、有効需要が不足しているため失業している状態をいう。

#### 摩擦的失業

労働市場に関する情報の不完全性により、職探しにおけるタイム・ラグ（時間）のため失業している状態をいう。

#### 構造的失業

最終需要・生産技術・労働条件等の変化によって労働需要の構造と労働供給の構造との不一致が発生し、その不一致を原因として発生する失業をいい、労働のミスマッチによる失業と呼ばれる。

上記のとよによる失業を非需要不足失業といい、この失業率を自然失業率ともいう。

### 2. U V 曲線

#### (1) U V 曲線と自然失業率

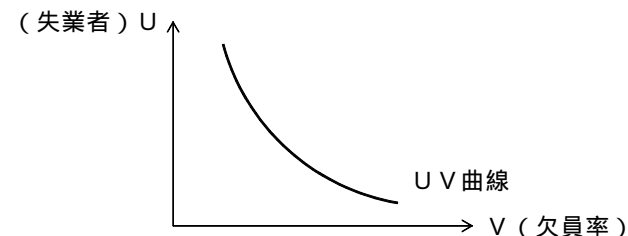
企業の「人手不足の度合い（欠員率 = 未充足求人率（V : Vacancy）」と「失業率（U : Unemployment）」の関係を表したものをU V 曲線（ベバレッジ曲線）という。ここでの人手不足とは、企業の求人件数から実際の就職件数を引いた企業の未充足求人を意味している。

今、 $L^D$  = 事前の労働需要量、 $L^S$  = 事前の労働供給量、 $L$  = 事後の労働雇用量、 $U$  = 失業率、 $V$  = 欠員率（未充足求人率）とする。

$$\begin{aligned} L^D - L^S &= (L^D - L) - (L^S - L) \\ &= \frac{(L^D - L)}{L} \cdot L - \frac{(L^S - L)}{L} \cdot L \\ &= V \cdot L - U \cdot L \\ L^D - L^S &= (V - U) \cdot L \end{aligned}$$

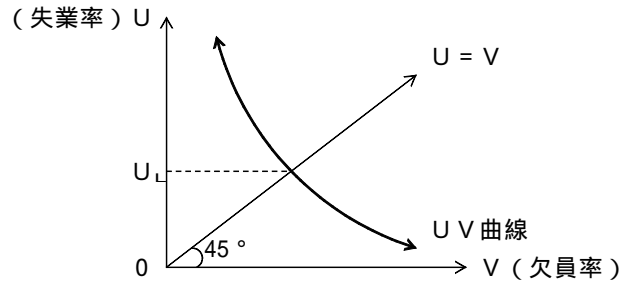
短期的に事後の労働雇用量  $L$  と欠員率  $V$  を所与とする。超過需要（ $L^D > L^S$ ）が存在すると欠員率  $V$  が上昇するか失業率  $U$  が下落するかを生む。よって、欠員率  $V$  と失業率  $U$  は負の関係をもつので、 $U V$  曲線（ベバレッジ曲線）は右下がりの曲線となる。

また、景気が拡大して未充足求人率（欠員率） $V$  が上昇すると失業率  $U$  が下落し、景気が後退して未充足求人率（欠員率） $V$  が下落すると失業率  $U$  が上昇するので、欠員率（ $V$ ）と失業率（ $U$ ）はトレード・オフの関係にあり、失業率（ $U$ ）と欠員率（ $V$ ）の平面上では右下りの曲線となる。



$V = U$ （45°線）が成立する失業の水準では労働市場が均衡し、賃金のインフレ・デフレが発生しない状況である。この45°線とベバレッジ曲線（ $U V$  曲線）との交点が労働市場が均衡している下での失業率  $U_N$  で、構造的失業率ないし自然失業率といわれるものである。

また、 $L^D = L^S$  下における失業は有効需要不足による非自発的失業がないということであって、労働市場の特有な事情によって発生する失業の存在を否定するものではない。その意味で自然失業率の失業は自発的失業である。



また、雇用のミスマッチによる失業と、転職・職探しプロセスでの失業（摩擦的失業）を、景気循環とは独立に起こるものであって労働市場の構造に根ざしたものであるという意味で、構造的失業 $U_L$ という。

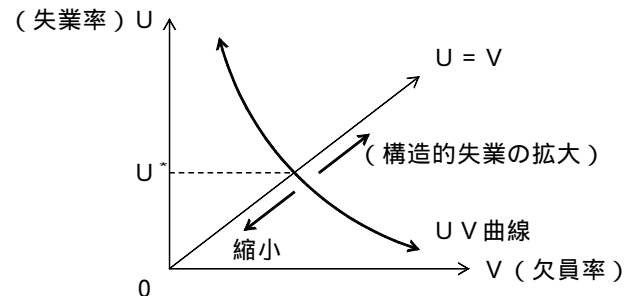
また、景気循環的に起きる循環的失業を「需要不足による失業」という。

$$\text{完全失業率} = \text{構造的失業率} + \text{循環的失業率 (需要不足による失業率)}$$

## (2) 労働のミスマッチと労働需給

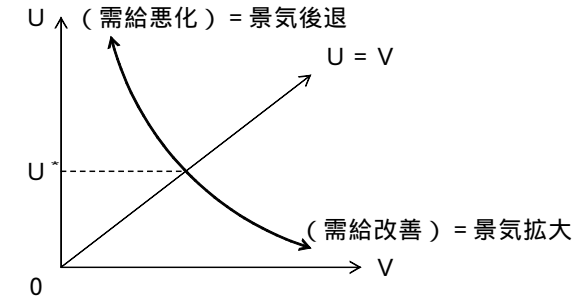
### 労働のミスマッチの拡大と縮小

UV曲線が右上方にある程、未充足求人率（欠員率）Vと失業率Uが上昇するので構造的失業が拡大したことを意味する。逆に、UV曲線が左下方にある程、欠員率Vと失業率Uが低下するので構造的失業が縮小したことを意味する。



### 労働需給の悪化・改善

UV曲線上の左上方の部分（景気後退局面）は失業率Uが高く欠員率Vが低いので、労働需給が悪化していると見ることができる。また、UV曲線上の右下方の部分（景気拡大局面）は失業率Uが低く、欠員率Vが高いので、労働需給が改善されていると見ることができる。



- \* 失業保険の給付期間が長いと、失業していても一定の所得が保障されているためモラル・ハザードが発生し、職探しのための失業である摩擦的失業が増加すると考えられる。  
逆に給付期間が短くなると、摩擦的失業は減少すると考えられ自然失業率は低下する。
- \* 技術革新の進行により産業構造が変化すると、ミスマッチによる失業が増加するため、自然失業率は上昇する。
- \* パートタイム雇用の普及は労働市場の構造変化である。構造変化が起きると構造的失業の増大により自然失業率は一時的に増大する。また、正社員雇用主体の雇用形態からパートタイム雇用の増加への変化は、正社員雇用を望む人達の職探しのための失業を増加させるため、自然失業率は上昇する。
- \* 自然失業率は労働人口構成や年齢構成によってそれぞれ異なり、例えば壮年世代は労働のミスマッチも低く（失業水準も低く）、老年世代は失業率は高く、かつ、欠員率が非常に少ない労働の需給の悪化状況が高い水準にある。高齢者の就業希望が増加すると自然失業率は上昇する。
- \* 失業保険制度が充実すれば、労働供給者の労働意欲を低下させるので、労働市場において、自然失業率は増加する。